

愛媛大学教育学部教員養成課程の第5回学校飼育動物講習会及び5年間の中間評価概要

平成29年3月
愛媛県開業獣医師会

一般社団法人愛媛県開業獣医師会（ベツターえひめ、以下本会）は、平成24年から愛媛大学教育学部の学校教員養成課程の学生に「学校飼育動物」の講習会を行っている。第5回講習会（平成28年12月5日）までの受講者総数は約200名となった。今回は第5回までの受講生のレポートや講習会における質問や印象などを検証し、今後のあり方や課題を考えるために総括した。本講習会の趣旨は、在学時に獣医師から学校飼育動物に関する一般および基礎知識や健康衛生管理方法などの講義と、さまざまな動物にふれあう体験実習を基本とし、関連した文部科学省の学校飼育動物に関する指針や動物愛護法などの詳細内容は、本会が作成したテキスト（本会ホームページに掲載）の配布によって補填し、教師としての学校飼育動物の意義や生徒への対応を考える起点を作ることにある。

講習会は、1）まず先生から動物に馴れよう、2）学校飼育動物の代表例として本会獣医師が指導しているうさぎの飼育具体例や注意点並びに人畜共通感染症、3）さまざまな動物や生物に実際に触れあう経験、の3部から構成されている。

2. 動物に対する意識の新たな起点

1) 受講生の動物に対する意識や経験と起点

受講生には動物に対するいくつかの共通点が見られる。最も象徴的なのは、ほとんどの受講生がペットの犬や猫などの飼育経験がなく、さらに犬、猫以外の動物や昆虫などの生物にも触れる機会さえ持っていないことである。結果として理由が不明なまま、生き物を敬遠する先入観によって苦手意識のある人の方が多い。同時に、生命の尊厳、寿命、そして死を考える機会も少ない。受講生の自己分析によれば、多くは核家族化、生活様式や環境、犬などに噛まれたことの不快感な印象などによる原因が大きい。

講習会の第1部の「先生からまず動物に馴れよう」は、受講生の過去の背景がどうであれ、まず動物に触れる体験と苦手意識を解消し、馴れる意識への変移点

あるいは起点を作ることが目的である。過去5回の講習会では、第3部の動物に触れる実体験によって、動物に対する考え方がリセットされ、この目的は達成されている。

2) 動物飼育に対する心理及び具象面の^{らんしょう} 濫觴

受講生の学校飼育動物の飼育によって得られる期待は、心理的及び具象的效果に大別される。

心理面では、まず受講生の生き物の生命などに対する考え方が激変する。すなわち、苦手意識の原因を見直し、整理し、教師として、動物だけでなく昆虫などあらゆる生き物に接する基本的な考え方の発起点となっている。その結果、教師になった立場で自分のことを考えることと、将来の生徒の知識や情緒の助長まで及んでいる。

生徒に対する心理的及び情緒的な効果は、受講生のさまざまな考えを誘起する。例えば、命、寿命、死、虐待、いじめ、思いやり、忍耐、連携、仲間意識などを挙げている。多感期の子供の精神的な面を良い方向に育てるために、いかに助長するかとの思いは強い。答えは一つではなく、さまざま、受講生自身の宿題である。将来良い結果を得る機会になってくれることを願っている。

もう一つは、動物飼育の具象面である。先生と子供の動物の飼育管理の責任、観察力、忍耐、継続性、連携など具体的に教育の場を作ることによる効果を考える始点になっている。特に、先生の役割は、動物の適正な飼育、生徒への平等な機会供与と補助、観察力の助長など具体的な指導を考える機会になっている。

レポートでもっとも多く取り上げられているのは「生命」と生徒のアレルギーの問題である。受講生の生活環境や成長過程で身近に死を体験する機会が少ないために不安を抱いていると自己分析している。学校飼育動物の「死」への対応の不安が大きい。学校飼育動物として選択される動物種は、人より寿命がはるかに短い。さらに、病気や事故などによる死も想定される。不可避なことである。重要なことは、「死」の責任で、誰の責任かという追及ではなく、「先生が死の責任を引き受ける」ことの助言は、多くの受講生が受忍する寛容性を持っているのは安心できる。生徒が「死」を経験することは、人格形成の重要であることをいかに生かすかを考える機会になっている。

生徒のアレルギー問題は直面する問題である。アレルギーのある生徒にとっては動物の被毛などのアレルゲンによる発現や重症化リスクの可能性がある以

上、配慮すべき不可欠な課題である。さらに教師として、アレルギーの生徒に対するいじめへの発展にも配慮が及んでいる。この課題に対してほとんどの受講生が様々な対応を考えている。

2. 学校飼育動物の飼育に関する法令遵守

教師として学校飼育動物の飼育を遂行するには、適正な飼育管理に関する様々な法律や指導指針や制限がある。その内容については、講習会で配布したテキストに記載した。最近、学校飼育動物の情報も増えているので、合わせて学んで欲しい。ここでは、学校飼育動物を適正に飼育管理するには、地域獣医師との連携が必要であることを記しておく。

3. 動物の健康・衛生管理と感染防止

講習会の第2部では、実際に学校飼育動物の健康診断や治療を行っている本会の獣医師から、うさぎの餌の選択や糞の観察の要点、さらに抱き方、獣医師の立場から教師が知っておくべき動物の健康・衛生管理方法などの基本について紹介している。

動物の健康維持だけでなく、飼育者の教師と生徒への動物からの感染防止、咬傷などの対処の重要性を、人の感染例を具体的に挙げて強調している。また時間の関係で詳細な説明はできないが、動物種ごとの人畜共通感染症に関する知識は事前に学んでおく必要性を伝えている。

人と動物の両者の疾患や感染防止などの基本は、動物と飼育舎を清潔に管理すること同時に、飼育者の手洗いや消毒の励行を強調している。飼育者の手指の消毒は、実際の動物のふれあいの前後で体験できるようにしている。

4. 動物のふれあい体験

講習会で最も大きな効果が得られるのは、生き物に触れる体験である。

犬、ウサギ、モルモット、ハリネズミなどのほ乳類や、蛇、亀、トカゲなどの爬虫類はじめ、多種多様な動物に触れる時間を設けている。

毎回、受講生が動物に近づき、触れた瞬間に上がる歓声が動物に対する意識が変わる。レポートの内容を大別すると、次のようになる。

受講生の関心が高く、動物や生き物の苦手意識を解消する大きな効果がある種は、蛇とハリネズミである。実際に触れることで、体温や体表面の感触から受

ける体感によって、視覚や想像からの敬遠や警戒心を取り除き、親和的な意識改善効果は大きい。

うさぎやモルモットでは、解剖生理的な特徴の着眼、動物が安心する抱き方などの体験と同時に、体温、心拍動、匂いや排泄物も生命の実感や様々な発想が生まれる効果がある。

この時間で各講師からの助言は役に立っている。

後記

5年の間を通じて、本講習会の最大の目的である動物や生き物に対する先入観や理由のない苦手意識の解消と、教師として適正な学校飼育動物を考える起点になっていると確信している。講習会によって、教師として生徒に動物の知識を与え制限するのではなく、生命や死など情調の養成だけでなく、生徒の様々な発想力を増長できる可能性を期待したい。

本会は講習会の適正性や効果を判断するために、毎年、独自に受講生のレポートをまとめてホームページに公開している。より多くの方々の意見も得ながら、さらに良い成果が得られるように検討しながら、本会の事業として今後も継続していきたいと考えている。

以上